
宝石箱の外

中宮寺 澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝石箱の外

【Nコード】

N1658P

【作者名】

中宮寺 澪

【あらすじ】

その日、彼女は泣きそうな笑みを浮かべて僕を迎えた。周りの喧騒が消え去ったかのような一瞬を生きて、僕たちは静かに灯火に触れる。残酷な未来を忘れぬように、心に刻みながら見るトウキョウ。宝石箱をひっくり返したかのような煌きが、ひどく憎らしい。――

――静かに紡ぐ純愛。けれど背後には厳しい現実。冬の初めの物語。

前篇

「ずるいよ。」

月と星を完全に無視したように地上を埋め尽くす輝きを一瞥して、綾はぼつりとつまらなそうに零した。クリスマスという祭典を前にしたトウキョウはいつになく浮かれたようにぎらぎらとした煌きに覆われ、とりあえずな悩みはすべて後回しにしているように見えた。少なくとも、僕にとっては。

「…何が？」

ちらりと横に並ぶ綾を盗み見てから、静かにガラスに映るぼんやりとした姿に視線をそらした。なんでもないようにつぶやいた彼女にならって、僕もなんでもないようにつぶやく。周りの音が聞こえなくなったかのように、BGMでざわついたフロアを気にもせず僕たちは小声で会話する。

「今が。」

「ずるいかな。」

「ずるい。」

淡泊な会話に色はない。あえて言うなら、水分をたっぷりと含んだ曇り空のような重たい灰色をしていた。決して居心地が悪いわけではない。そうではないけれど、周りのカップルに比べてあまりに感情のない僕たちの声は、どこか他とは違うという特別感をはらんでいた。

僕がRG地区から戻ってきたとき、彼女はほんの少しだけ困ったように笑った。少しやつれたね、と言ってふわりと真新しいマフラ―を首にかけ、おかえり、と微笑む。そんな綾を見て、ぼくはやっぱり困ったように笑ってただいま、と言った。

周りにも同じようなカップルがあふれていた。なんとなく騙され

たように僕たちはいつもより軽い足取りできらきらと輝く街に繰り出した。彼女はそれでもいつもどおり、淑やかに艶めいていた。

「どこに行きたい？」

僕がそう聞くと、すっかり用意していたかのように彼女は展望塔、と言った。

トウキョウの真ん中に聳え立つ円錐形の展望塔は、トウキョウだけでなく別の地区も見渡せた。それこそが彼女の狙いだと気づくこともせず、僕は静かに展望塔行きの電車のチケットを買う。特に会話はなかった。僕が元気だった、と聞くと、綾はまあまあね、と小さく笑う。それ以外の会話はしてはならない気がした。今の僕に、ただ馬鹿みたいに陽気になる勇氣はなかった。結局臆病だったただけだ。今の不安定な状況を壊すのが怖くて、昔は自然に触れられた綾のその真つ白で美しい指先に触れることもできなかった。ぎりぎりの綱渡りの会話をするぐらいなら、いつそ静かに時をとみにすればいい。それが、きつと僕たちのやり方なのだろう。

「ねえ、」

展望塔の最上階に着くと、綾は少しだけ悲しそうにガラス張りの世界の向こう側を見つめた。僕は、ガラスに薄く映る綾の立ち姿を見ていた。ガラスの表面で視線が合う。手すりにもたれるようにして僕たちはやっぱり悲しそうに笑った。

「やっぱり、矛盾してるのかしら。」

自嘲気味に笑った彼女を見て、僕はぎゅうつと胸が締め付けられるような気がした。どうしようもないのだと知っていた。けれど選んだのは僕だし、それを受け入れたのも彼女だ。これは二人で決めたこと。だからこそきつと、綾も後悔はしていないだろう。それでもこうして悲しそうに笑うのは、どうしようもない現実を直視したくないからなのだ。

僕も、同じだ。

「してないさ。」

綾はそつと、手すりに乗った僕の指先に触れた。二本しかない僕

の指先は黒い手袋に覆われているけれど、そんなことは気にしない
とでも言つかのように優しくなでる。

「やっぱり、ずるいよ。」

「そうだね。」

僕の記憶の底に、綾がいてくれればいいと思った。

こうしてガラス越しに視線を合わせて、遠くの輝きを恨めしく見
つめながら、一時を共有できればそれでよかった。

そう思うことが、唯一僕たちを救う道だった。

中篇

「柏原 愁。」

静かに読み上げられた僕の名前は、まるで機械のように無機質な顔の男によって現実味を帯びた。

「以上、RG地区遠征部隊。総勢20名。」

敬礼した僕は、奇妙なまでに歪んだ顔をしていたことだろう。

20XX年秋。

他地区から完全に孤立した中央地区、別名トウキヨウは、いまや有象無象によってごった煮された別世界と化していた。犯罪で染め上げられたLM地区よりはましだが、それでも均衡が保たれているとは言えない。年々悪化する経済状況に、増えていく難民。トウキヨウの地区長は、そんな世界を憎んだ。増えすぎた人口を均一化するためにはしまったこと。それが、他地区の侵略だった。

なんとも幼稚な作戦だと僕はモニターに映るニュースをみて複雑な気分になった。彼らはあるうことか、弱小地区に戦争をしかけ、トウキヨウを広げる作戦を立てたのだ。トウキヨウ上層部は世襲制によって染め上げられたものばかりで、自分たちの行動が正しいと信じていた。民主化された世界には考えられないことだが、トウキヨウでの生活は近辺の地区よりは幾分かましだったせいで、地区民は黙って従うことしか知らなかった。地区外追放ほど怖いものはなかった。どつぷりと安寧につかりこんだ僕たちにとって、この世界は丁度良い箱庭だったのだ。

そして、他地区殲滅作戦は厳かに進められた。有名大学から知力・体力・精神力ともに有能な人材が集められ、訓練が開始される。誰もが疑問を感じていた。けれど、家族の安全と莫大な報酬を前に、優秀な男たちは拒否することができなかった。就職難、貧困。そんな彼らを救うために優秀な人材が削られることに、きっと誰もが異

を唱えたかったことだろう。それが人間というもの。本心ではそう思っても、命の重さに優劣など存在しない。潜在意識で、すでに彼らはあきらめていた。

そして、僕。

どういうわけかトウキョウでもトップの大学でよい成績を収めてしまった僕が、もっとも危険なR G地区に配属されないわけがなかった。覚悟していた。けれど、心のどこかで、いつも引がかっていた。

如月 綾。

半年前から付き合っている、僕がはじめて恋した女性。

彼女は強い女だと思う。いつでも弱い所を隠すように、ただ僕を支えてくれた。深い優しさで満ちた彼女は、どうしようもなく大切な人へと変わっていた。

「…覚悟は、してたのよ。」

R G地区に配属されたと告げると、彼女は寂しそうに笑った。

「おかしな話よね、戦争だなんてお金がかかることとして、ますますここが悪化するだけなのに。」

彼女は悲しそうにそうつぶやくと、そっと僕の頬に触れる。冷え性の彼女は、秋の終わりにはすでに指先を冷やしていた。じわりとひろがる冷たさに、たまらず僕はその手を握る。

「必ず、戻ってきて。」

強い意志を孕んだ瞳は、どこまでも澄んでいてまっすぐだった。

僕は静かにうなずくと、優しく綾の頭を抱く。柔らかな栗色の髪が流れて、ふわりとシャンプーの香りがした。

「一日だけ、休みがあるんだ。」

それは、どこまでも奇妙な制度。

兵隊の士気が下がらぬよう、政府が手配した休日制度だった。戦争中、たった一日だけ、好きな日に休みを入れることができる。その日を目標に頑張るため、生き残るため。その貴重な一日のために、僕たちは命を削るのだ。

「いつにしたら、いいと思う?」

そつと囁くと、彼女はほう、と息を吐いて冬の初め、クリスマス前がいい。と言った。

「どうして前なんだ?」

怪訝そうな僕に向かって、彼女は。

「当日は、奇跡が起きる日だから。その日までに、私はすべてが終わることを祈ってる。」

僕の前で、はじめて涙を流した。

戦争中、銃撃を受けて、僕は指をなくした。

仲間が死ぬことはあまりなかった。つまり、戦況は恐ろしいほどに良かったのだ。

素直に喜ぶべきことではないかもしれない。けれど、弱小地区はあまりに無防備だった。

小さな子供や若い女性の多い地区。老人ばかりの地区。

トウキョウは、それでも彼らから様々なものを奪うのだろうか。

僕たちが配属されたR G地区は、他の地区と違って科学者の多い地区だった。研究所が立ち並ぶ大通りを、僕たちはライフルを抱えて走った。彼らはやはり無防備で、隙だらけだった。次々と侵略が進む中で、僕は。

数日後に迫る綾との逢瀬に、思いを馳せていた。

「つ…やめてくださいっ!」

悲痛な女性の声を無視し、僕は綾のことだけを考える。

「ここには、大切な研究結果が…!!!!!!」

すべてを破壊しながら、ただ無常に足を進める。

恐怖など感じない。脳が麻痺したかのように、驚くほど冷静な僕がいた。

大きな音がして、そちらに視線を投げると。

がたがたと震えながら拳銃を握り締める、少女の姿。

「……悪魔っ……！！！」

悲痛な声に、共に行動していた仲間がライフルに指をかけた。あっさりと倒れた少女から視線をそらして、ようやく気づく。僕の指は、なくなっていた。

どくどくと流れ出る真っ赤な血液に、体が熱くなっていく。そして漸く、僕は痛みを感じたのだった。

後篇

「綾、」

たった数日前のことなのに、僕にはもう色褪せた記憶でしかなかった。眼下に広がるぎらぎらとした現実味の無い輝きは、戦争中だというのに気味が悪いほどにぎわっている街を照らすアクセントになっている。トウキョウに休戦に来た兵士が、少しでも穏やかになるように――そんなむちゃくちゃな理由で浮かれたこの世界は、数日間の夢らしい。数日をすぎれば元通りになるといつのだから、この時期に休日願いを出した兵士が多いことも頷ける。

白い頬を高潮させ、綾は静かに笑った。

「愁、わたし、今は考えるのをやめようって思ったの。」

ガラス越しでなく、直接僕を見上げる綾は、可憐で儚い。

「さつき、駅で貴方の顔を見たとき。ああ、もう全部どうでもいいやって。ただ貴方がここにいてのことだけで十分。そう思った。」

僕は、そつと綾の髪を梳く。柔らかな髪は、さらりと指先を抜けていく。

「だから、ね。」

視線がぶつかる。綾は、恥ずかしそうに笑った。

「貴方がちゃんともどつてきて、全部元通りになったら、そのときに考える。それまでは、」

綾の声が脳に直接響く。耳元で言葉を紡ぐ彼女が、どうしようもなくいいとおしい。

「貴方のことだけ、考えてるから。」

彼女の甘い声が、吐息が。

僕を、夢の世界へと導いていった。

「え…？」

如月 綾は、目の前の軍服の男にすべての思考が中断されるのを感じた。喉がからからに渴いて、瞼は閉じることなく見開かれる。声にならない声が唇から勝手に漏れ出し、気づけば頬に冷たい涙が流れていた。

「うそ、だって、」

—— 柏原 愁さんが、R G地区第三研究所内で、戦死しました。

「だって、愁は…！！！！」

—— 連絡が遅くなりましたが、亡くなられたのは一週間前。
「…そんな、」

昨夜、確かに自分の前で微笑んでいた彼。

優しく髪を梳いて、困ったように微笑んで。

彼は必ず戻ると、そう信じていた。

—— 最期に、綾さんの名前をつぶやいていたそうです。

深く礼をした軍服の男は機械的にそこまでいうと、静かに去っていった。

降りつづける雨に、昨夜と変わらぬぎらぎらとした煌きが滲む。膝について音もなく涙を流す彼女の冷え切った指先に、黒手袋の

皮の感触を、確かに感じた。

翌日。

侵略の中止と戦争の終結を告げるニュースが、トウキョウを賑わせた。

彼女の祈り通り、クリスマスを前に、すべてが終わったのだった。たった一人、冷え切った室内で。

綾は涙に濡れた瞳のまま、静かにレクイエムを奏でる。

真っ白な指先が鍵盤を叩き、彼女は歌う。

記憶の中で、この日だけは一生忘れぬようにと。

深い悲しみの中で、そうして彼の記憶を反芻した。

了
了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1658p/>

宝石箱の外

2010年11月27日20時58分発行